方向
第六〇号　一九八六年一二月二〇日　京都市上京区下長者町千本西入妙徳寺内　方向社

南山大師の戒律観（五）

赤谷明海

〈本論〉第二章　南山大師当時の教界状勢

仏教は初伝以来諸処にその弘伝を見たが、その発展過程は尚遅々たるものであつた。然るに羅什の来朝を期として大いに面目を一新し、『法華』『涅槃』『華厳』等の重要思想が整ふと共に、其等の研究講学が進み、爾来仏教は追々隆昌を見るに至るのであるが、それは隋唐時代に於いて最盛期を現出する。かかる最盛期の前半に位しているのが南山であり、彼の少年期には既に毘曇・涅槃・地論・摂論の各宗が存し、就中、地論宗・摂論宗栄え、又新に三論・天台両宗の成立を見、更に禅・念仏も相当の流行を示し、法相・華厳・密教等夫々宗派形成の全段階に位し、大乗教学の研究講学大いに盛んであつた。

かかる時代に生活した南山、特に戒律を研究し、戒律を奉持し、以て得道の証果を期し、以て仏法の久住を願つた南山の眼に、当時教界人の所説所行が如何に映じたかを探つてみよう。先づ仏教理論の盛大さに比し、その実践行法が兎角等閑視されてゐる事が挙げられる。『教誡律儀』には

「時有学人運情疎躁。求行者少。求解者多。於制儀門極為浮漫。」（正・45・869・b）

とあり、『行事鈔』の序にも、

「逮于像季時転澆訛。争鋒唇舌之間。鼓論不形之事。所以震嶺伝教九代聞之抜萃出類智術而已」（正・40・1・a）

と難じている。行を忘れた学問は単なる智術であり、涅槃への道に遠い。即ち『浄心誡観法』巻下に、

「欲得広知不欲広行。願多達解衆中独出。規貪虚響聡明声息背捨身心。野偷名利。三塗即至終無免期。」（正・45・833・c）

と誡めているが、恐らく当時は仏教盛んとは言へ、単に学問の面が盛んなるにすぎず、仏教本来の使命たる宗教的実践に於いては、尚注目される所少なかつたのであらう。〈注〉

〈注〉行的宗教と言はれる禅・念仏の流行が遅れたのも、この間の事情を語るものではなからうか。

行的に目覚め、涅槃を欣求する南山は、釈尊の真弟子としてその指導に与らんとする。此の仏弟子たる自覚に立つ者にとつては、持戒は生命であり、日常の細行と雖も重大事であり、威儀形式と雖も重要事である。然るに今『〈行〉事鈔』巻下を見るに、

「比時移情淡礼義云亡。…以武力為智能。指文華為英彦。如斯冒罔孰可言哉」（正・40・131・c）

と言ひ、此は抽象的であるが、他の所によれば、

「或高履長裾剔削光潔。揚彫綵之華麗。曜龍鳳之文綺。…山字在肩有竦凌雲之状。臣肘広脇志逾鵬翅之形。」（釈門帰敬儀』巻上・正・45・859・a）

と言つた状態である。斯の如きは余りにも末節に拘る様であるが、当時、僧侶の威儀悪く〈注1〉、風紀も乱れ

〈注2〉、仏弟子たるの自覚に立つ者にとつて苦々しい事情が多かつたのであらう。かかる事が延いては内、正法を滅し、外、世人の謗を招き、仏世尊に対する冒涜となる事を南山は憂へてゐる。

〈註1〉『浄心誡観法』巻上（正・45・822・b）に委し。

〈註2〉『行事鈔』巻上二（正・40・23・c）に男女間の悪行を説く。

然しこれらの悪行悪威儀は一部の道心なく、放逸にして五欲に貪着する者に関する事であり、それは持戒の重要さを知らない愚人のなす所である。ここに戒律に依つて行為の準則を与へる必要が生ずるのであり、勿論一部にその必要に応ぜんとする人々もあつたのであるが、兎角戒律に通じない結果、かへつて仏の制意に反し、所謂「非制に制し、是制に違す」る事となつたのである。『〈行〉事鈔』巻上に

「或非法之制。有過罪者露立僧中。伏地吹灰。対僧杖罰。如是衆例皆非聖旨。良由綱維不休法網。同和而作」（正・40・21・b）

とその一例を挙げ、更に

「師心制法者不少」（『羯磨』序・正・40・492・a）

と言ひ、斯の如きは全く自己の感情に任せて臆断するが為であり「照教無文検行違律」（『事鈔』巻中四・正・40・98・a）の結果となるのであるとする。南山はあくまで法中心的であり、個人の感情による推断を許さない。

以上の如く、自己の感情によつて勝手に仏意を解し、是制を非とし、非制を是とする輩の中、特に南山の攻撃する所は、悪無碍とも言ふべき似而非大乗学者の言動である。

「今学大乗語人心未渉道。行違大小二乗。口説無罪無慚淫欲是道。身亦行悪。随己即是。違己為非。」（正・40・20・b）

とは『事鈔』巻上に述べる所であるが、同鈔巻下にも、

「今学戒者多不食之（肉）。与中国大乗僧同例。有学大乗語者用酒肉為行解。則大小二教不収。自入屠児行内天魔外道尚不食酒肉。此乃闡羅之将吏耳」（正・40・118・a）

と憤慨してゐる。当時大乗教学の隆昌と共に、皮相的な無碍を云々し何等切実なる反省錬磨を用ひない軽佻なる大乗学者の跋扈は、多分に南山の誠実なる内心を苦しめ、大乗に対する批判を極めて峻厳ならしめた事は間違ひなからう。彼等は戒律を以て形式と侮りながら、自らその形式に拘泥してゐる事を裏切つてゐる。『事鈔』（正・40・49・B）には、

「今時不知教者。多自毀傷云。此戒律所禁止。是声聞之法。於我大乗聚同糞土。猶如黄葉木牛木馬誑止小児。此之戒法亦復如是。誑汝声聞子也。」

と言つて彼等の主張を挙げてゐるが、それは教を知らず、而も我と我が説を毀傷する言分であるとし、そもそも大小二乗は理として分隔なく、吾人の悟解の相違によつて大小の相違を生ずるのであり、悟解は吾人の心の問題であつて単に経典の形式や教旨のみによつて大小を分判する事は出来ないと言ふ〈註〉。

〈註〉『事鈔』巻中（正・40・49・c）に「悟解在心不唯教旨也」と言ふ。

されば南山は、あくまで思ひ上がつた戯論を排し、内容なき大乗人の言動を痛烈に批判して堕地獄の業と言ひ

〈註〉、世尊の制意に順じて戒を受けながら、而もそれを以て小乘と貶する不徹底さを、

「戒是小法可宜捨之。便即不肯可宜持之。又復不肯豈非与煩悩合。卒難諫喩又可悲乎」（『事鈔』正・40・50・a）と極言し且つ悲嘆し、又

「今時剃髪染衣。四僧羯磨。伽藍置設訓導道俗。凡所施為無非戒律。若生善受利。須身乗御之処口云我応為之若汚我起罪。違犯教網之処。便之我是大乘不関小教」（『事鈔』正・40・50・a）

と言つてゐるが、実にその慷慨の情、悲壮と言ふべきである。

〈註〉「白衣生天出家人入地獄」（『有部律』に出づ、正・40・5・c）の言は傾聴すべきである。

以上要するに何れの時代と雖も同様であらうが、当時にあつても非行非威儀の僧徒多く、ややもすれば、良識ある出家の悲憤と、一般世人のひんしゅく〈原漢字〉をかつた事は事実であり、南山にあつても決して快い事ではなかつた。然し乍ら南山の最も憤慨し、以て自己の宗教観に動かす事の出来ない観念を植ゑつけるに至つたものは、自称大乘人の言行であり、其等に対する非難の語調には極めて鋭いものが感ぜられる。

孤山雁信 —赤谷明海書翰集— （四）

原田憲雄編

★1982.9.16.〈消印は10.16.〉足利八郎氏（東京都港区芝公園一—二—一七芝公園シティハイツ三〇七）宛。葉書。差し出し住所は宇治市伊勢田町中山七三。

天候不順のせいか、今年はカキノヘタムシの異常発生で、わが家の柿は三本共実が一つもなりません、普通なら

ばもう実の色づく頃だがともみにしかけた葉を空しく仰いでいます、昨夜平安の同窓会総会があり、若林、大河内、大八木、和治、山本（孝清）と一緒になりました、いずれ劣らぬ白髪のオッサンばかり。再来年が卒業後満五十年なので繰り上げて来年集まろうということになりました、席上大河内の曰く、足利は名医だと、以て瞑すべし。お元気で。

★1985.7.11. 同氏（滋賀県滋賀郡志賀町小野朝日一一一四－一三）宛。葉書。墨書。

旧暦七月十五日が中元ならば新暦では八月十五日頃のハズなのに東夷の習俗か商人の宣伝か早くからワイワイいうので世外逸人もついつられ湖畔でショボクレている老医に気つけ薬を呈上する羽目とはなったりけり　いささか早いが適当な時期に服用せられよ、昭和六十年の夏を生きられて同慶至極、大幸々々　頓首

★1985.7.15. 同氏宛。葉書。

長かった梅雨もやっと上り今日は爽やかなお元〈天〉気、タイミングもよく湖畔からの爽風菓が到来しました、いずれゆっくり賞味させていただきます、ときに先般来、歩くと太モモのつけ根が痛く　今朝近くの病院へ行きました。門をくぐると患者はあわれなもの、放射能を浴び、血をとられ、静注をつめこまれ、物療室でおさえこまれ、お土産に薬袋をくれて、明日またいらっしゃいとのこと。ここらで年寄りの特権を行使せねばと静注はイヤやから受けんぜと捨独白を残して帰りましたが、骨に異常なしとのことで一安心。この間の尾瀬歩きがこたえたようです。十五日

★1986.6.9. 同氏宛。手紙〈封筒なし〉。

拝復　六日付のお便り嬉しく拝見、お説の如く殊の外の御無沙汰、当方こそ失礼しました、このところ全くの筆無精となり、代るべき電話は聴きづらくて敬遠し、あちこちに不義理を重ねている始末です。

貴兄、町内会長で御多忙とか、誠に適材を選んだものと、町民のため御同慶の至りですが　一面お気の毒な気もします、当方では隣組長は順番制、町内会長は組長会の互選ですが、その時には女性が出ること。誰か男の人が当ることになっています、この遁甲法のお蔭で拙者未だ曾て経験なし。従って貴兄の如き煩わしい雑務から解放され、悠々閑々と毎日を過ごしている筈の小生ですが、それがけっこう気ぜわしいのは体力の減退と老化による能率の悪さによるものでしょうか。冬の間はともかく、暖かくなると共に庭掃除や畑仕事に追い立てられ、毎週の習字の上にＮＨＫの篆刻講座を受けたり、龍大での有志者による戒学研究会（週一回）や同志社での国書逸文研究会（月一回）に出たりで、その予習に急き立てられています、そのうちに歯は次から次へと抜けるし、所用で外出もしなければならず　ああ忙しというところです、

飛蚊病で治療中とか、目の酷使によるものでしょうか、病院勤めの身とて手ぬりはないでしょうが、たいそうなことにはならぬよう御用心の程願います、小生も視力益々減退、このところ読書、執筆に老眼鏡も余り役に立たなくなって参りました、対象物に顔をひっつけて用を足しています、もう年ですから仕方がないでしょう。五月で満七十才、役所から健康手帳の交付を受けました。これで歴とした年寄りになりました。年寄りの恩典を活用すべく、近く病院で定期検診を受けに出かける積りです。いずれ悪いとこだらけでしょうが、今のところ気になるような症状はありません。

くだ々々と書きましたが此方も近況を報告し御返事とします、奥様によろしく　六月九日　明海　八郎大兄

★1986.7.25.〈消印は26.〉同氏宛。葉書。

よく降りました、伊勢田町で浸水と新聞に出ていたがと電話を受けましたがどの辺がつかったのか判りません、何分広いですから。小倉町はもとの池に戻るまでには至らなかったものの相当心配だったとか、野球堂はどうだったでしょうか。

昨日五色そば到来、有難く頂戴しました　郡山は家内の故郷、但し製造元はやや西南の小泉で、石州流茶道の元祖片桐侯の城下町だったところです、何にしてもどんな味か、近くつる々々やる積りです、有難うございます、

日曜日

1986.11.30.

原田慶

カット　原田道子

門をあけてすぐポストへ行った。日曜日の朝は千本通りに人影も少ない。自動車がぽつんと現れては早いスピードで走り去る。がらんとした通りに信号だけが青から黄色、赤に変わる。

大きな四角のポストは、入り口が二つになって、宛先が京都府内のものとその他の地域とに分かれている。何か月か前に古い円筒形のものと変えられて、そろそろ朱色も少し街になじんできた。その上にミルクコーヒーの空き缶が一本立ててあった。まわりに鳥のふんが白く乾いている。

ポストの上は誰が掃除をするのだろうか、とちょっと立ち止まっていたが、空き缶はそのままにして帰って来

てしまった。

塀の外まで来て見上げると、葉をすっかり落としたムクの高い枝に、鳩が一羽とまっている。黒くしぼんだムクの実をつつきながら注意深く渡っていたが、しばらくして、突然に飛び立っていった。

家にかこまれた低い空間に、まだ暗さを残しながら、空は明るくなって、今日も晴天である。どこからかパサパサと鳩が羽ばたきをする音が聞こえる。

寒くなるにつれて丸く見える鳩のからだは羽毛がふえるのだろうか。庭の池でよく水浴びをする。後には、銀色の粉のような光の輪が水面に浮かび、秋の水がれに、落葉を積もらせた貧しい池を、一層小さな水たまりのように見せる。

午後、一日の中で最も暖かい時間に、自転車で北野へ行った。

途中、立本寺の鬼子母神様をおがんで行こうと思いついて、寺の門を入った。門の前には立て札があって、境内を汚さないように、犬のふんは後しまつを、鳩に餌をやらないようになどの注意がしてある。鬼子母神堂の回廊には、歩くところもないほど鳩のふんが落ちていることがある。

今日はきれいに拭き掃除がされていたが、白いあとは、なかなか消えない。さい銭箱の両横の床に、かたまってあとがついている。ちょうどそのあたりの天井の梁に巣があったらしい。上を見ると、新しく緑色の金網が張りめぐらされ、鳩が巣をかけるのを防ぐようにされていた。それでも二羽ほどの鳩が、すき間にとまっている。

鬼子母神堂を出て、大きな本堂の前方を通り抜けようとしてふと見ると、ちょうど西日に温められた、本堂正

面の広い階段に、ネコが何匹かかがまっているらしいのが見えた。

近づいて行ってみると、床下や落葉の積もった上など、見えなかった所にもネコが眠っている。白と茶のぶちや、三毛ネコ、茶色のしま、黒いとらネコ、大きいもの、中くらいのもの、静かに伸びやかに、美しいネコの群である。私が近づくと、用ありげに床下から出て来たのもあったが、私を見て何を感じ取ったのか、さっさと階段の方へ上がって行った。階段の前には木の柵がしてあって、人は入れないが、ネコにはその方が都合がよくて動こうともせずに、首を少し起こしてこちらを見たネコも、みんなまた眠ってしまった。

落ち葉の上に半ばうずもれるようにしているネコは、体が一ばん大きくて、目をあけようともせずに眠り続けている。

数えてみると、十一匹いた。時々本堂の天井で、鳩が羽音をたてて飛ぶが、よほど馴れて、この辺りのことをしりつくしているように、ネコ達は何の反応も示さない。

こんなにたくさんのネコが集まっているのには、ちょっと驚いたが、童話作家のどなたかがおられたら、面白い説明をして下さるのではないかと、いろいろなネコの話を思い出した。

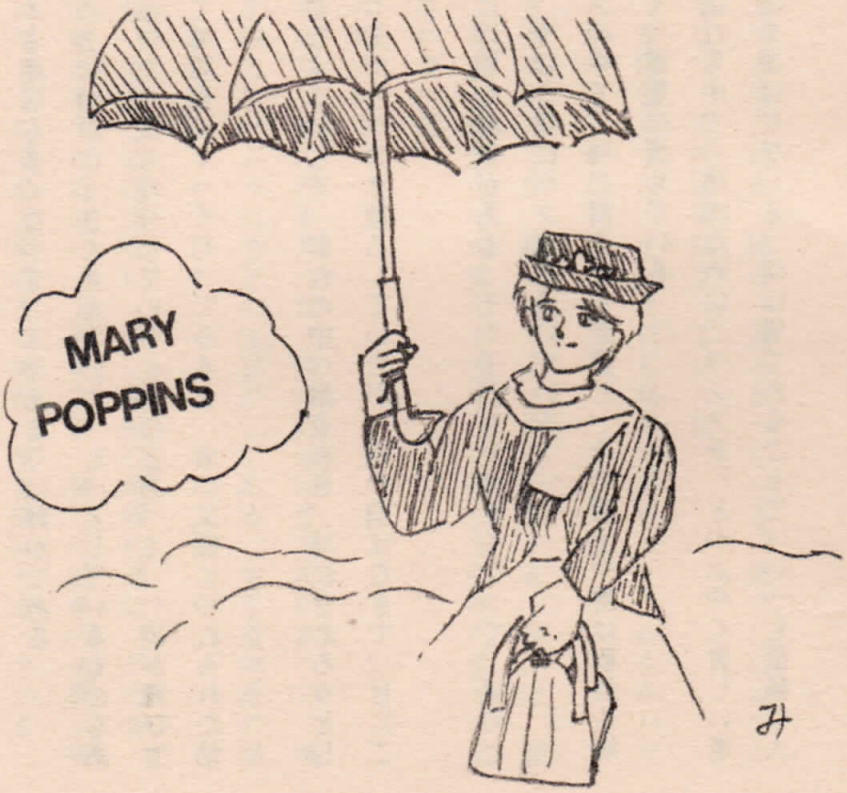
エゴン・マチーセンというデンマークの絵本作家の『あおい目のねこ』を、娘の幼い頃になんべんも読んだ。

むかし　青い目のげんきなこねこが

おりました。

あるとき、こねこは、ねずみのくにを

みつけにでかけました。
こねこは、いさみにいさんで、
でかけました。
なにしろ、ねずみのくにをみつけたら、
もうおなかをすかすことがありませんもの。
瀬田貞二さんの訳である。
目が青いために、黄色い目のネコ達に馬鹿にされ、相手にもしてもらえないネコは、水たまりに自分の顔をうつしてみて、「青い目はきれいだし、かおもちっともへんてこじゃない。」と考える。そして勇気を出して、ネズミの国をみつけ、やっと他のネコ達に認められるようになる。
今、ここにいる十一匹のネコ達は、太陽に温められた板や枯葉の上で十分に満ち足りて眠りこけているように見える。
あまりいつまでも眺めていて、ネコが気を悪くする



と困るので、私はそっと引き返した。

下の森へ出ると、買物の人が多いが、日曜日は休業する商店も多くなって、ふだんよりは静かである。

天神さんの前は、いっそうひっそりしていて、鳥居の上に鳩がたくさん並んでいた。じっとしているものもあるが、くるくるまわるように動いているのや、羽根を広げたり閉じたりしているものなどあって、一羽が飛び立つと、次々に同じ方向へ飛んで行った。自転車を押して鳥居をくぐって行ってみると、若い父親につれられた幼い兄弟が、パン屑をまいているのであった。

弟の方は鳩の群れにうずもれそうになりながら、かがむようにして、群れの中へ餌をおき、鳩にさわろうとして手を伸ばしている。兄の方は立ったまま、思いっきりあたりへまき散らしていたが、鳩の羽ばたきで、目にごみが入ったらしい、父親のずぼんに顔を押しつけてぬぐっている。

時の移り変わるのは早いが、いつ行っても天神さんには同じ風景がある。その子どもが大きくなって、鳩のところへ来なくなっても、他の同じような幼い子どもが、やはり鳩にパン屑をまいている。

鳩のいる風景で印象的なのは、映画メリー・ポピンズの中で、鳩の餌を売る老婆と、その頭上や肩に群れる鳩の姿である。一枚の名画を見るように、みごとに美しく、郷愁に満ちている。

ジュリー・アンドリュースの〝二ペンス〟の歌声の流れる中で「鳩のために二ペンスを」とつぶやく貧しい老婆が、けむるようなうすもやの中の石段にすわって、鳩を遊ばせている。鳩は鳩であることで、いつも孤独な人の友達である。

鳩のために二ペンスを使おうとする子どもと、貯金をして利子をふやすことの方が有益だと、二ペンスを取りあげようとする大人達との間にさわぎがまき起こる。

妖精のメリー・ポピンズは、子どもの心を忘れてしまった大人達から、子どもを守るために、どこへでもパラソルをさして降りてくる。

先年、長崎へ行った時に、平和公園の平和の像の上を群れ飛ぶ鳩を見た。公園はいくらか雑然として、祭りの後の広場のようであった。観光バスが来ては、平和の像の前に並ぶ人々の記念写真を撮り、またしばらくして去って行く。鳩は降りてこようとせず、空を飛びまわって、像の肩や腕、頭にとまった。

中勘助の『鳥の物語』の中にも鳩の話がある。

——すっかりお伽話だと鳩は思った。眼下に展開されるのはお伽の世界である。ただ颯々として空を飛ぶ自分らのみがそうでない。彼らは自分らのような風をきる翼は別としても、馬のように達者な、または狼のようにすばやい四本の足ももたず、二本の棒杭みたいな足でよちよちと歩きまわる人間のみじめさを憐れんだ。彼らは心ゆくばかり高く、低く、速く、緩く、卍巴と光の中を飛び廻った。彼らは光をうって飛んだ。彼らは光を呼吸した。彼らの翼は光で洗われ、瞳は光で磨かれた。彼らは嬉々として光の化身のように飛びまわった。

と表現されている。オリンピックやさまざまの競技大会で鳥のように飛び、鹿のように跳躍し、白鳥のように舞う人も沢山あるのだが、これはナザレのヨハネのもとに集まった人々の空を飛んだ鳩である。

そして、ナザレのイエスに

汝ら空の鳥をみよ、蒔くことなく、刈ることをせず、倉に蓄えることもない。然るに汝らの天の父はこれを養いたまう。

ということを教えたのもこの鳩であった。

しかし、倉に蓄えることをせずに、鳩を養う力を、私達は自然から奪いすぎていないだろうか。

日曜日も常と変わらず日暮れは早い。春にはつがいで巣づくりをした鳩は、冬には群れといっしょにすごす習性だという。

子ども達をせきたてるように、手を引いたり、抱きあげたりした人や、何かの祈願に来たらしい若いカップルが、天神さんの参道を下がってゆく。

和田利男『漱石雑考』　1986.12.13.　原田憲雄

十二月四日、著者恵投。その夜、一読了した。「はしがき」にいう。

夏目漱石の人及び文学について、私は過去に左の四冊を刊行して来た。／『漱石漢詩研究』（昭19・秋　人文書院）／『漱石のユーモア』（昭22.5　人文書院）／『漱石の詩と俳句』（昭49.12　めるくまーる社）／『子規と漱石』（昭51.8　めるくまーる社）／以上の外に『文苑借景』（昭和47.6　煥乎堂）という一書があり、それには「賢治・漱石・杜甫など」という副題を付してあるが、以上の諸書の中に収録していない

拙稿もなお幾編か残っている。その或るものは雑誌等に発表しているが、それに未発表の新稿数編を加えて一冊にまとめ、ここに『漱石雑考』と題して上梓することにした。これによって既刊拙著の不備を補い、漱石を対象として続けて来た仕事に一応のピリオドを打ちたいと考える。…

人文書院の二冊は絶版で、古本でも手に入れがたい。めるくまーる社の二冊と『文苑借景』、同じくめるくまーる社の『杜甫―生涯と文学―』『漢詩清響―訳詩と注釈』、「李賀の鬼詩とその形成」の校刷などをかつて著者からめぐまれたり図書館で借りたりして読んでいる。それをこの機会に読み返した。『杜甫』『文苑借景』は五〇〇頁を越し、他の二冊も四〇〇頁前後。しかし和田氏の著書はすべて行文が平明で、複雑な事態も十分に分析解明したのち、穏やかな論理に乗せて語る。楽しんで読むうちに大冊の終わりに来る。

李賀（七九一―八一七）…後世の批評家から鬼才と呼ばれ、その作品は鬼詩と称せられる。「鬼」とは彼の場合、死者の霊魂や俗信上の神を素材とすることが多かったのでそう呼ばれるのである。（漱石と李賀）

この記述はなんでもないように見えるかもしれぬ。だが、李賀が鬼才と呼ばれその詩を鬼詩と称する所以を、中国の歴代の批評や、彼の全作品から、帰納し確定したのは、氏の「李賀の鬼詩とその形成」が最初であり、その結論がここに、さりげなく記されているのだ。

漱石という人は、死者に対しては、とりわけ温かい思いやりを示す人であった。（漱石と古白）

この言葉に注はついていないが、「漱石の子規追悼句」や「漱石の鳥獣悼亡句」（漱石の詩と俳句）を読み合わせると、実例を全集から採集した上での断定であろうことが察せられる。平出彬「夏目漱石と平出修」（『春

秋』No.284）に、大正三年四月十七日の書簡の漱石が修の永訣式に出た記事をとりあげ、「特別の親近感からではなく…」といっているのをみたが、解釈はいずれにせよ、これも和田氏のいう死者への思いやりの一例だと思った。

幕末・明治に生れ、明治・大正に生きた知識人にとっては、漢詩・漢文は和文・和歌・俳句と共に、教養の故郷であった。人によっては漢詩・漢文に重きをおいたかもしれぬ。そのことの一斑は森鷗外の「雁」や「キタ・セクスアリス」で察せられようが、実情は、ことに戦後に育った人には、想像もつかないだろう。だが、日本の近代文学の作り手は、みなそういう人たちだったので、彼らの教養の故郷たる漢詩・漢文に思慮を行き届かせなければ、まともな文学史も批評も書けないはずである。ところが世に流布するものにはそのような観点の抜け落ちたものが多く、ちかごろやっと反省されはじめた。

漱石の漢詩・漢文も、国文学界では久しく無視され、その重要性にはやく着目したのが自然科学者や外国文学研究者や外交官であったのは皮肉だが、これを研究対象として最初に正面からとりあげたのは「中国文学者」和田氏の『漱石漢詩研究』だった。一九四四年のことである。それから四十年、氏の研究は、他の漱石研究者にもっとも乏しい「教養の故郷」から彼の全体を照射することに務め、数々の発見を重ねてきた。そのことに対する評価は十分とはいえまいと思うけれども、氏の著書がこれだけ刊行されるのは、世に無名の具眼者が多いしるしでもあろう。

『宮沢賢治の童話文学』（1949. 不言社）も研究の先駆で、しかもその包括的な点ではまだこれを越えるもの

が稀なのではなかろうか。だがそれにもましてわたしがうたれるのは、対象との一期一会ともいうべき出合いからその研究が始まり、対象の生命をねばりづよく追求し、その純粋を見出して讃嘆するところにある。

昭和十八年の五月に私は神戸から大津へ居を移した。そして日本軍の敗北が決定的となった二十年の三月、空襲時の危険を思って、幼い三女と次男を岡山県の親戚に疎開させた。次いで六月、残りの子供三人と家内をも疎開先に送り、女学校に勤めをもつ私は独り自炊生活に入った。／初めに疎開させた子供は淋しくてたまらなかったのであろう。たどたどしい文字で手紙を書いては、何かおもしろい本を送ってくれとせがんで来た。私は大津市中の本屋を探し廻ったが、子供向きの本はほとんど見当たらなかった。…久しぶりに岡山の疎開先を見舞ってやろうと計画していたある日、一軒の書店にはいって寒々とした本棚を見廻していたら、ふと、子供向きのものらしい装幀の本が目についた。手に取って見たら『風の又三郎』という本だった。私が「宮沢賢治」という名前を知ったのはこの時が最初である。…もうほかには童話の本はないかと尋ねたが、モンペをはいたおかみさんは、「童話にもなんにも、そこに並んどるんがうちの商売物の全部どすねん。」と、そっけない返事をした。だれの気持もとげとげしくなっていた暗い時代だった。だが、その時の私は、子供を喜ばせてやれる本がやっと見つかった満足感で、明かるい気持になっていた。「ありがとう。」と、私はたぶん礼を言ってその店を出ただろうと思う。／二三日後、私は混雑する列車に乗って岡山方面へ向かった。京都駅か大阪駅かでやっと座席に掛けることのできた私は、リュックサックから例の『風の又三郎』を取り出して本を開いた。…　（文苑借景）

これを読むと、氏が中国文学のなかで杜甫を、「朱門酒肉臭く、路に凍死の骨有り。妻を異県に寄せ、十口風雪を隔つ。誰か能く久しく顧みざらん。庶はくは往きて飢渇を共にせん。」と歌ったあの篤実の詩人を研究の中心に据えたことが納得される。

話が堅苦しくなってしまった。氏は「どちらかというと真面目な教師の方で、講義の最中わき道へそれるようなことは決してしゃべらない」と思い込んでいたところ、女子学生のプレゼントから「長恨歌」の講義に「長生殿」という金沢の名菓についてしきりに喋っていたことに思い当たる、といったユーモラスな随筆の書き手であり、淡遠清雅な俳句の作者としての経歴も久しい。

一九五八年、論文の抜刷を恵まれて以来、ほとんど三十年になるが、会ったことはない。『文苑借景』巻末の写真でみれば、論文から想見されるとおりの老教授だが、一九〇四年生れだから数えで八十三歳、教職から去って久しく、さきごろ白内障の手術をしたが、その後も研究・著作に励んでおられるらしい。漱石についての仕事の「一応のピリオド」も、わたしとしては、「一応」の方にアクセントをつけて、これからも新見を示し続けられることを待望したい。

立目　楽　の　雨

―ランカーの岸辺で　（二八）―

原田憲雄

55. そのとき、ランカー王は、仏世尊が自分の質問を許されたのを聞きおわった。彼は無垢の無量の光明の輝く

大きな宝玉の蓮花のようにもろもろの宝玉でかざられた山上で、無量の天女にとりかこまれ、無量の種々の異花、種々の異香、抹香、塗香、宝玉のはた、のぼり、日傘、宝冠、瓔珞などの装身具をつけ、また世間で未だ嘗て見も聞きもしたことのない種々のすばらしい装身具をつけ、また無量の種々の楽器をもち、それはもろもろの神、龍、夜叉、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、人間、人間以外のものがもつ楽器をはるかに超えるものである。また三界、すなわち欲界・色界・無色界のあらゆる楽器をすべてみな幻出し、また十方の諸仏の国土のあらゆる種々のすばらしい楽器を幻出した。無量の大きな宝網を幻出し、一切の諸仏、ボサツ、大衆の上を覆った。また無量の宝玉のはたを立てた。ラーヴァナ王はこのような幻化をなしおえ、その身はターラ樹の七倍もの高さの虚空に昇り、そこにとどまり、種々の舞伎・音楽の雨を降らせ、種々の花の雨を降らせ、種々の香の雨を降らせ、種々の衣の雨を降らせ、虚空中にいっぱい大雨の降り注ぐように、仏と仏の子らに供養し、供養の雨を降らしおわると、上から下におり、虚空中で、第二の雷や太陽の光に輝く大きな宝玉の蓮花王座のある種々の宝山の上に坐った。

魏訳「爾時。楞伽王。聞仏世尊。聴已問已。彼於無垢。無量光明。大宝蓮花。衆宝荘厳山上。無量天女。而自囲遶。現於無量。種種異花。種種異香。散香塗香。宝幢幡蓋。宝冠瓔珞。荘厳身具。復現世間。未曾聞見。種種勝妙。荘厳之具。復現無量。種種楽器。過諸天竜。夜叉乾闥婆。阿修羅迦楼羅。緊陀羅摩睺羅迦。人非人等。所有楽具。復随三界。欲界色界無色界。所有楽具。皆悉化作。復随十方。諸仏国土。所有種種。勝妙楽具。皆悉化作。化作無量。大宝羅網。遍覆一切。諸仏菩薩。大衆之上。復竪無量。種種宝幢。羅婆那王。作如是等。変化事

已。身昇虚空。高七多羅樹。住虚空中。雨種種伎楽。雨種種花。雨種種香。雨種種衣。満虚空中。如澍大雨。以用供養。仏及仏子。雨供養已。従上而下。於虚空中。即坐第二。電光明。大宝蓮花王。種種宝山上。」

唐訳「爾時。楞伽王。蒙仏許已。即於清浄光明。如大蓮華。宝山頂上。従座而起。諸婇女衆。之所囲繞。化作無量。種種色花。種種色香。末香塗香。幢幡幢蓋。冠珮瓔珞。及余世間。未曾見聞。種種勝妙。荘厳之具。又復化作。欲界所有。種種無量。諸音楽器。過諸天龍。乾闥婆等。一切世間。之所有者。又復化作。十方仏土。昔所曾見。諸音楽器。又復化作。大宝羅網。遍覆一切。仏菩薩上。復現種種。上妙衣服。建立幢幡。以為供養。作是事已。即昇虚空。高七多羅樹。於虚空中。復雨種種。諸供養雲。作諸音楽。従空而下。即坐第二。日電光明。如大蓮花。宝山頂上。」

梵文 Atha khalu Laṅkādhipatir bhagavatā kṛtāvakāśa utthāya tasmād rasmi vimala prabhād ratnapadma sadṛśād ratna śikharāt sāpsaroganapariveṣṭo vividhair aneka vidhair nānā prakāraiḥ puṣpa mālya gandha dhūpa vilepanacchatra dhvaja patākā hārārdhahāra kirīta muktair anyaiśca adṛṣṭaśruta pūrvair ābharaṇaviseṣair viśiṣṭais tūryatālāvacarair deva nāga yakṣa rākṣasa gandharva kinnara mahoraga manuṣyatikrāntaih sarva kāmadhātu paryapannān vādyabhāṇḍān abhinirmāya ye cānyeṣu buddhakṣetreṣu tūryaviśeṣa dṛṣṭaḥ, tānabhinirmāya bhagavantaṃ bodhisattvāṃśca ratnajālenāvaṣṭabhya nānā vastrocchita patākaṃ kṛtvā sapta tālān gagane'bhyudgamya mahāpūjā meghān abhipravṛṣya tūryatālāvacarāṇi nirnādya tasmād gaganād avatīrya sūrya vidyūtprabhe dvitīye mahāratnapadmālaṃkṛtau ratnaśikhare niṣasāda, (そのとき、実

に、ランカー王は、アプサラスの群れに囲まれ、世尊に機会を与えられて、あの無垢の光の輝きのある宝玉の蓮花のような宝山の頂きから立ち上り、多種でいろいろの形相のある花、花環、香、抹香、塗香、日傘、旗、のぼり、瓔珞、王冠、冠飾、その他の、かつて見も聞きもせぬ素晴らしい装身具をつけ、神、龍、夜叉、羅刹、ガンダルヴァ、キンナラ、マホーラガ、人間、人間ならぬ者のより優れた楽器や拍子をとるものを持ち、一切の欲界に属する諸楽器、また他の仏国土でかつて見られた特異な楽器を幻出し、世尊と諸菩薩を宝網で覆い、種々の衣の旗をかかげ、ターラ樹の七倍の高さの天空に昇り、供養の大雲をそそぎ、もろもろの楽器を鳴り響かせ、かの天空より下り、太陽や稲妻の光をともなう大きな宝玉の蓮花で飾られた宝山の頂きに坐った。）

前回の 54. の梵文のうちのウペーンドラとは「インドラ神の次後に生れた」という意味で、ヴィシュヌ神又はグリシュナ神をさす。

さて 54. は、漢訳経典の用語でいえば「授記」に当るだろう。すなわち予約である。54. に即していえば、ランカー王がボサツとしての最高の法雲地に到達し、大宝蓮花王座にのぼり灌頂をうけるだろうと、如来（梵文は世尊）がランカー王に約束したのだ。するとわたしがその前に、ラーヴァナが永久に仏にならずに…といったことと矛盾するのではないか。殊に魏訳には「仏の職を…」とあり、55. ではラーヴァナがその大宝蓮花王座に坐る。ここまで読んできてラーヴァナが仏となるのは間近かだと考えても、他の経典の授記の例からすれば、不思議ではない。だが、これから後、「請仏品」の終わりまで、蓮花王座に坐ったラーヴァナに対する灌頂の場面はなく、次の「問答品」以下にはラーヴァナは全く出てこない。だから、これが「授記」とすれば予約はあるが、

その実効をもたらすべき「灌頂」がないのだ。それでは世尊が予約をキャンセルしたことにならないだろうか。

魏訳の「受仏職」は、どうやら梵文の「灌頂」に対応するらしい。しかしその「灌頂」は予約の中での言葉にすぎず、「法雲地」に到達したボサツに対するもので、仏となることを約束するものではない。最高のボサツの仕事は、内容としては仏の仕事と同じであろうから、仏のような仕事という意味で「仏職」といったので、仏そのものになるのとは別のことなのだろうが、魏訳のこの訳語はまぎらわしい。

大宝蓮花王座にラーヴァナが坐る場面は、魏訳はもとより梵文でも唐訳でも、宝玉が輝き、種々の香が馨り、音楽が響き渡り、燦然とした美景で、まさにラーヴァナの成仏が完成した錯覚に陥りそうだが、『楞伽経』の文面をたどるかぎり、ラーヴァナは大宝蓮花王座につきはするが、そのラーヴァナに対する灌頂は記されず、ましてラーヴァナの仏に成った記事はどこにも無い。燦然たるこの場面にそそぐ音楽の雨は、ラーヴァナが仏になることとは違う何かを告げて降ったのだ。

彼の持つ楽器は、神・龍・夜叉…人間・人間ならぬ者のより優れたものだという。能楽などで持物が持ち主を示すように、経典や仏像でも持物で持主の階位を示すことがよくある。その例から言えば、このときラーヴァナは神・龍・夜叉…人間・人間ならぬ者を超え、仏国土の楽器を幻出しうる神通力を持ったことになろう。それならば、大宝蓮花王座に坐ったラーヴァナはもはや夜叉でも羅刹でもないはずである。それが何かは示していないが、『楞伽経』の発端から今までに出てきた配役の誰に近いかとなると、この経の初めに現れたボサツの上首のマハーマティということになろう。そのことはラーヴァナの坐る大宝蓮花王座の位置付けからも伺える。

魏・唐訳の「第二」に対応する梵文は dvitīya で、もとより「第二の」という意味もあるが、直前の名詞と結んで「を伴う」という意味もあり、梵文の文脈からは「太陽や稲妻を伴う」とするほうがよく、わたしもそう訳しておいた。しかし魏・唐訳が「第二」とするのは、「第一」の席は世尊が坐り、マハーマティが着くべき「第二」の座に今ラーヴァナが着くことにより、ラーヴァナとマハーマティの一体であることと、仮面の転換が間もなく行なわれることを『楞伽経』が示そうとしているのだと解釈し、ボディールチがこの訳語を択び、唐訳はこれを踏襲したのだ、とすればよく通る。

（一九八六年十二月十九日）

※第五八号正誤　一三頁一一行　一の心→人の心

瑞垣　鵠　鵠　—李清照（三九）—

1986.12.20.　原田憲雄

すらりとした姿　気高いとまではいえなくても／盃の前の橘などしもべとすることができましょう／誰が愛してやることか　水辺に落ちぶれて／玉の骨　氷の肌の　枯れもせぬのを／／うてな並べ連なる枝を　誰が摘むやら／酔うて貴妃の肩にもたれた玄宗のよう／居士のむく手に実が見えてくる／まあどちらにも　それぞれの新しさを味わうことですね

この調は、七言律詩を上下段に分けたような形で、従って五十六字。前段三平韻、後段二平韻が普通だが、これは前後段の韻が違うので、詞ではなく、七言絶句二首の連作と見る人もある。「双銀杏」の副題が着いていて二本ならんだイチョウの樹を、というよりはその実のギンナンの二粒ならんだのを歌うのであろう。

風韻雍容未甚都。　Fēngyùn yōngróng wèi shèn dū.
尊前甘橘可爲奴。　Zūnqián gānjú kě wéi nú.
誰憐流落江湖上，　Shuí lián liúluò jiānghú shàng,
玉骨冰肌未肯枯。　yùgǔ bīngjī wèi kěn kū.

李清照より少し前の梅堯臣が「江南によき樹あり、すくすくと天にそびゆる」とうたい、欧陽脩が「イチョウの実百個だに、賜ひたるみ心うれし、…人により物も貴とし、人賢きも捨つれば沈む」と答えているのを頭に置いて、不遇の自らの身上を述べたのでもあろうか。「気高いとまでは言えない」のは江湖に流落しているからである。橘を木奴、木の下僕（しもべ）、というについては故事があるが、ここに持ち出すまでもあるまい。以上前段。

誰教並帯連枝摘，　Shuí jiào bìngtì liánzhī zhé,
醉後明皇倚太眞。　zuìhòu Míng huáng yǐ tàizhēn.
居士擘開眞有意，　Jūshì pokāi zhēn yǒu yì,
要吟風味兩家新。　yào yín fēngwèi liǎngjiā xīn.

唐の玄宗が蓮の花の開くのを見て「言葉の分かるこの花（楊貴妃）とどちらがいいか」と臣下に聞いたとか、酔った玄宗が自らシャクヤクの花を手折ってやり、貴妃の肩にもたれて一緒に匂いをかいだとか…そんなエピソードがあって蓮やシャクヤクを一層高貴にしているのだ。ギンナンだって、せめてわたしがむいてやればその実の堅い殻のなかの真実の美しい仁（たね）が見えよう。あちらにもこちらにもそれぞれに新鮮な味わいがあろう。